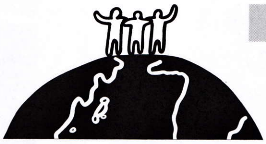
廃棄物資源循環学会・環境学習施設研究部会

vol.9

環境学習施設のつくり方

―地域に多面的価値を創出する施設―

モノ・ヒト・コトの視点で見る工場見学



工場見学のつくり方

大型バスが建物入口に寄せられ扉が開かれると、たくさんの子どもたちが次々とバスを降り、建物のなかに吸い込まれていきます。

入口付近では、「こんにちは」と呼びかける工場の従業員の姿が見えます。負けじと大きな声で「こんにちはっ」とこたえる子どもたち。ごみ処理施設における、ある日の小学校4年生の社会科見学の様子です。

毎年多くの施設でこのような光景が見られるのではないでしょうか。

今回は、ごみ処理施設において行われる工場見学を、「モノ＝設備」「ヒト＝案内者や働く人」「コト＝見学案内」の視点で、事例とともに見てみたいと思います。

モノ～多様な説明用設備と工場見学

多くのごみ処理施設で、子どもたちをはじめ、一般の見学者がごみ処理の工程を学ぶための見学コースが整備されています。そこで設置された説明用の設備はさまざまです。プロジェクションマッピングやミニシアターなどが設置され、娯楽施設のような空間が整備されている施設もあれば、そこで働く従業員や行政の職員による手づくりの説明用パネルや写真などがあちらこちらに掲示されている施設もあります。もちろんその中間的な施設もあれば、独自の特徴的な学習設備を有する施設もあり、それぞれ創意工夫されていますが、共通するのは子どもたちを受け入れる施設側の熱意です。

施設の案内者は、用意された設備や自ら製作したパネルなどを使って、試行錯誤を積み重ねながら、一生懸命ごみ処理の流れやしくみ、そして3Rについて伝えます。

知多南部広域環境センター「ゆめくりりん」では、設備の見学、1分程度のショート映像視聴、クイズの3つを利用し、専属スタッフが案内をしています。

クイズは、挙手により簡単な選択問題に答えるシンプルなものですが、理解度に関係なく全員が参加できるため、とても盛り上がります。

ごみ処理の工程のうち、どこの施設でも人気となるのは、大量のごみを混ぜるクレーンの見学ができるごみピット、車や人の様子を見ることができるプラットホームです。ごみを焼却処理する工場では、焼却炉は要となる設備ですが、焼却炉そのものに動きがなく燃えているところも直接見ることができないため、子どもたちを引き付けることが難しい場所です。

豊中市伊丹市クリーンランドでは、焼却炉体験ができる設備が設置されており、ごみを高温でしっかり燃やしていることを直感的に学べます。

工場見学では、五感を使った体験的な学びが望まれることがあります。工場で見たり感じたりできるものとしては、炉内等を疑似的に体験する設備や映像、機械が発する振動や音、あるいは、工場の展望コーナーから眺める地域の自然環境など多種多様です。

ヒト～多様な案内者、働く人

ごみ処理施設には、これらの設備を使って案内を行う人がいます。案内者は、SPC（運営のための特別目的会社）の従業員、行政の職員、環境学習施設の指定管理者など、さまざまなケースが見られます。

豊田市環境学習施設エコットでは、ボランティアによる渡刈クリーンセンターの見学案内を実施しています。ボランティアは、専門家ではなく一般市民です。難しい言葉をつかうことなく同じ目線に立ち、見学者にわかりやすく説明をします。さらに、同じ市民同士という気安さで見学者も気軽に質問をすることができます。

一方ボランティアにもメリットがあります。活動を通じて仲間ができること、エコライフの実践力が高まること、健康維持につながることなど多くのメリットが考えられます。小学生の見学では異世代の交流も社会学習につながります。

見学中には、工場で働く人の姿を目にする機会があります。小学生にとって働く場としての工場は未知の世界です。作業着を身に着け、ヘルメットや防毒マスクを装着した作業員の姿は格好良く見えると同時に、ごみ処理が大変な仕事であることを伝えるきっかけにもなります。とくに、手選別での危険物除去作業は、安全なごみ処理を支える大切な作業ですが、人の手で行っていることで衝撃を受ける見学者もいます。

ごみ処理の工程を見学することは機械を見ること、と思われることもありますが、そこに「伝える」人や働く人の姿があってこそ、本当の意味で理解につながります。

コト～多様な目的にこたえる工場見学

ごみ工場見学では、小学生をはじめとした環境学習や3R意識の向上ばかりが目的ではありません。

近隣の住民の方は、近くにできたごみ処理施設がどのような場所なのか関心を持って訪れます。安全な運転状況を知ることで安心につながります。

高齢者や障害をお持ちの方の場合は、体力に合わせて楽しめるように配慮することで、娯楽の一環として見学を楽しむことができます。

また、収集運搬従事者、地域の分別指導員など、ごみ処理に関連した業務を行う人が、業務上の情報収集を目的に訪れることもあります。

また、夏休みのイベントとして開催されることもあります。大阪市の舞洲工場には街歩きツアー参加者や、海外からの観光客が訪れることもあります。

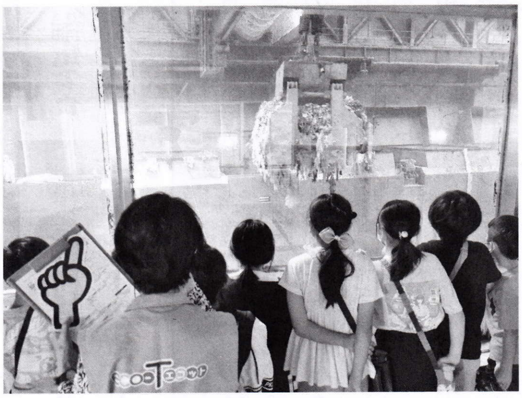
モノ・ヒト・コトの視点でつくる工場見学

環境学習施設研究部会では、これまでさまざまな施設において、熱意をもって先進的に取り組む環境学習の事例を見てきました。今回は、その一部をご紹介しながら整理をしました。

見学コースを整備するにあたっては、さまざまな議論が行われていますが、まずは「見学者に何を伝えるのか」、「地域にとってどのような学習の場にするのか」という基本的な考え方を追及することが大切です。さらにモノ・ヒト・コトの3つの視点で建設から運営までを見通した議論を行うことが重要であると、本稿のとりまとめのなかであらためて確信できました。（環境学習施設研究部会）**W**

子どもたちの一番の楽しみ、クイズを出題する設備

ごみがしっかり燃えていることを学ぶ炉内体験設備


注目ポイントで使う指差しパネルを手にしたボランティア

●連絡先●
環境学習施設研究部会

「環境学習施設研究部会」で検索すると、（一社）廃棄物資源循環学会環境学習施設研究部会のページがでてきます。同部会がfacebookの「環境学習施設を考える会」も運営しています。